～読んで、感じて、伝えよう！～

2021 年度

入賞者作品集

2021 年度
読書推進プログラム
～読んで、感じて、伝えよう！～
入賞者作品集

目白大学新宿図書館

もくじ

受賞者一覧　1

館長講評　2

受賞作品
〔一等〕
悩みと向き合うこと
　山口　明華（心理カウンセリング学科３年）　5

〔二等〕
『舟を編む』を読んで見えたもの
　包國　佑菜（児童教育学科３年）　9

夢を叶えることが正しいとされているこの時代に読むべき本
　佐竹　祐美（児童教育学科２年）　12

〔佳作〕
推しと共に生きる
　水野　帆花（児童教育学科３年）　16

アルジャーノンに花束をを読んで
　薮﨑　累維（韓国語学科１年）　19

『夢をかなえるゾウ』を読んで
　飯沼　菜奈（児童教育学科３年）　22

〔審査員特別賞〕
「韓国文学」
　本村　波瑠（韓国語学科１年）　26

作品は原文のまま掲載しています

受賞者一覧

【一等】
山口　明華（心理カウンセリング学科３年）

【二等】
包國　佑菜（児童教育学科３年）
佐竹　祐美（児童教育学科２年）

【佳作】
水野　帆花（児童教育学科３年）
薮﨑　累維（韓国語学科１年）
飯沼　菜奈（児童教育学科３年）

【審査員特別賞】
本村　波瑠（韓国語学科１年）

【参加賞】
１９名

館長講評

2021 年度「読書推進プログラム～読んで、感じて、伝えよう！～」に応募し、高い評価を得て受賞した学生の皆さん、おめでとうございます。
目白大学新宿図書館長として、謹んでお祝いを申し上げます。

１等　悩みと向き合うこと
心理カウンセリング学科　　山口　明華さん
　１等受賞おめでとうございます。「悩み」を風船に例えて深く思索した力作です。悩みというよりも不安への対応に思いをめぐらせていると感じました。
　特に夏目漱石の『それから』を例として、働くということを取り上げて考え抜いています。未来に向けて働くということにさらに思索を深めてください。

２等　『舟を編む』を読んで見えたもの
児童教育学科　　包國　佑菜さん
　２等受賞おめでとうございます。辞書は使うものといった感覚が強いと思います。辞書を作るもの、育てていくものといった考えでの思索にとても新鮮さを感じました。人生という言葉を辞書で引くことで辞書が生きていると感性が素晴らしいと思います。力作です。

２等　夢を叶えることが正しいとされているこの時代に読むべき本
児童教育学科　　佐竹　祐美さん
　２等受賞おめでとうございます。夢を叶えるという意味を深く考えていると思います。実現できなかったことだけを見つめるのではなく、実現してきたことに目を向けなければならないのですね。死神が語ったマルティン・ルターの「死は人生の終末ではない。生涯の完成である」に向かって頑張ってください。

佳作　推しと共に生きる

児童教育学科　　水野　帆花さん

佳作受賞おめでとうございます。主人公の気持ちに感情移入をしていく中で、推しと共に生きるということを深く考えています。自分の一押しのアイドルを、主人公同様に人生の生き甲斐として考える若者の気持ちが分かったように思えます。あなたが自分らしくあるために、推しと付き合っていってください。

佳作　アルジャーノンに花束をを読んで

韓国語学科　　薮﨑　累維さん

佳作受賞おめでとうございます。学歴重視社会と表現していますが、手術によって知能を高めたチャーリーが決して幸せでなかったことに思いを馳せ、自分自身のダウン症児との関わりについても思索を深めています。幸せとは何かを考えさせることできる作品です。

佳作　『夢をかなえるゾウ』を読んで

児童教育学科　　飯沼　菜奈さん

佳作受賞おめでとうございます。 成功を求める強い思いを持って読書をしてきたことを振り返って、自分が成功したいという思いが、度が過ぎていたと反省したのですね。そして、感謝する心を思い起こしていることがよく伝わってきました。その気持ちを大切にしてください。

審査員特別賞　「韓国文学」

韓国語学科　　本村　波瑠さん

審査員特別賞受賞おめでとうございます。冒頭の「人間の中にある地獄を見たような容赦のない本」という記述が印象的でした。人間として生きるということは何かについて改めて考えさせられました。そして、日本文学の風土とは異なる世界、韓国の人たちの精神性を感じ取ることができました。

審査に当たった先生方、学長先生をはじめとする関係の諸先生方、プログラムの告知から表彰までの運営をしてくださった図書館スタッフにお礼を申し上げます。

新宿図書館長　中山博夫

一等

悩みと向き合うこと

心理カウンセリング学科３年
山口明華

『悩む力』集英社
姜尚中著

私にとって悩みとは風船であり、世の中は風船の空気入れです。風船と聞くと良いと感じる人が中にはいるかもしれませんが、私にとっては良いものではありません。私は、これまで悩むことが良いことだと思えたことがなく、生きていくうえで必要なことなのだろうかとまで思ってしまいます。悩みが増え、風船が膨らむたびに、心が圧迫されるような、蝕まれていくような気がして、悩むことに嫌悪感を抱いてしまいます。それだけでは終わらず、いつか風船が爆発して、自分がいなくなってしまうのではないかという不安や恐怖さえ感じてしまいます。というのも、私は自分の言動が人の目にどう映っているのかを気にしすぎてしまうタイプで、悩みに結び付く要因が多いのです。今日の、「あのときの行動に周りは引いていないだろうか」「裏でなにか悪く言われていたらどうしよう」といったように、とにかく周りの目を気にしてしまいます。悩みというよりかは、不安と言った方が正しいのかもしれません。しかし、こうした不安要素がいくつもの感情や思考、体験と結びついていくことで、最終的に悩みに集約されていくのです。外に出て活動した日には、このような不安がいくつもついてきては、風船の中に入っていき、風船は少しずつ大きくなっていきます。毎日これを繰り返しています。人によっては理解しがたいことかもしれませんが、これが私の性格なのです。

そんな悩むことの必要性を見いだせない私とは対照的に、姜尚中さんは、『悩む力』という著書の中で「“人間的な”悩みを“人間的に”悩むことが、生きていることの証」と述べています。

『悩む力』は、目まぐるしく変化していく現代社会に生きる人々が抱える苦しみについて、文豪の夏目漱石と社会学者のマックス・ウェーバーを手掛かりにしながら、悩みをどう乗り越えていくかについて考えていく本です。

著書は、この本の中で、現代の特徴を二つ述べています。一つ目は、「自由の拡大」です。現代社会では、インターネットの普及により私たちの自由は拡大しているが、それに見合った幸福感は得られていない。反対に人間関係は殺伐とし、何かに急き立てられ余裕がなくなっていると述べています。二つ目は、「変化のスピード」です。目まぐるしく変化する社会には「不動の価値」というものがほとんどなく、人間も変化することが求められています。一方で、人間は「不動の価値」を求めようとするため、その矛盾に精神を引き裂かれていると述べています。

これらの苦しみのもとをたどっていくと、「近代」という時代にたどり着きます。この時代に、文豪・夏目漱石は、現代社会を生きる私たちと共通点のある、文明の進展による孤独を感じる人々の物語を多く描いています。また、同じ近代に社会学者として活躍したマックス・ウェーバーも、人間が孤立していく過程を導き出しています。彼らは、近代という時代に生じた問題に「悩む力」をふり絞って向き合っており、現代社会を生きる私たちへの手がかりを残しています。そんな彼らから手がかりを見つけ、悩みと向き合う方法を、一冊を通して見つけ出していきます。

ここまで『悩む力』の内容や特徴について述べてきましたが、これとはまた別に、私が個人的に思うこの本の最大の特徴があります。それは、悩みを九つのテーマに分類している点です。この点を最大の特徴であると思った理由は、風船の中身にあります。初めの方に、「私にとって悩みは風船である」と述べましたが、この風船は複数の悩みを一つに集めた大枠のことを指しています。その大枠の風船の中を覗いてみると、自分にはいくつもの悩みがあるけれど、自分は今一番何に悩んでいるのかという細かい部分については自分でもわかりません。しかし、この本を読んだことでそれに気づくことができました。というのも、本を読みながら印象に残った部分に付箋をつけていたのですが、読み終えた後テーマ

ごとに付箋の数を数えたところ、明らかに数に差があることに気づきました。その気づきによって私の一番の悩みが何であるのかがわかりました。これが、「悩みを九つのテーマに分類している」点を最大の特徴であると捉えた理由です。

私の今の一番の悩みは、「働くこと」への悩みです。これは、第六章『何のために「働く」のか』を呼んだことで明らかになりました。この章は、夏目漱石の『それから』という作品を手がかりに進んでいきます。『それから』という作品は、ブルジョワ事業家の息子である代助が主人公です。代助は、優秀な頭脳を持っているものの、働かずに親に頼って暮らしている十近い男性です。働くことに価値を見いだせない代助は、ナルシスト的生活を送りながら、お金を贅沢に使うことで、自分は働かなくてよい階級であることを誇示しています。しかし、そんな代助は友人の妻である三千代を愛したことで、親に勘当され、三千代を養うために働かなければならなくなってしまいます。

著者は『それから』を通して、働くとは、「「社会の中で存在を認められる」ということ」だと述べています。それは、「人がいちばんつらいのは、「自分は見捨てられている」「誰からも顧みられていない」という思い」であり、「誰からも顧みられなければ、社会の中に存在していないのと同じことになってしまう」ということであると述べています。これらの考えから、最終的に著者は、「「人はなぜ働かなければならないのか」という問いの答えは、「他者からのアテンション」そして、「他者へのアテンション」であるという結論を導き出しています。ここでいうアテンションとは、「ねぎらいのまなざしを向けること」を指します。

私は、他者からのアテンションにとても強い印象を受けました。私は、今のアルバイト先に在籍して約二年半になります。アルバイトの歴伸びるほど、立場が上がり、出来なければならない業務内容も増えていきます。出来なければならないというよりは、周りには優秀な学生が多く、皆ができるから私も出来なければならないと思ってしまうと言った方が正しいです。皆が進んで取り組んでいる業務に私は触れることができずにいます。とにかく自信が無く、ミスして迷惑をかけてしまったらと不安になり、自信が失われ、積極的になることができません。

その結果、他者からのアテンションを実感することができていないように感じます。しかし、この本を通して、自分の記憶に強く残らないところで他者からのアテンションを受けているのではないかと考えました。その結果、皆と同じであるべきだということにこだわり過ぎていてわからなくなっていただけで、私は数えきれない程他者からのアテンションを受けていることに気づきました。そのアテンションの中には、自分にしかできない業務の中で向けられているものがあることにも気づきました。その気づきによって、皆と同じでなくても良い、自分にしかできないことがあるのだから深く悩まなくても良いのだと思うことができました。著者は、この章の最後に他者からのアテンションによって、「社会の中にいる自分を再確認できるし、自分はこれでいいのだという安心感が得られる」と述べています。この考えは、この本を読んで変わることができた私の心を、そのまま表している一文であると思います。

初めに述べたように「私にとって悩みは風船である」という考えは変わりません。しかし、風船の空気が少し抜けて楽になったように思えます。悩みとの向き合い方、乗り越え方を知れたことは、私の世界を変える大切な経験となりました。

二等

『舟を編む』を読んで見えたもの

児童教育学科３年
包國佑菜

『舟を編む』光文社
三浦しをん著

私は、今回この本を読むまで「辞書」が、私たちと同じように生きている人の手でつくられている、という当たり前のことを考えたことがなかった。小学校や中学校の辞書を使う授業の中で使い方を習い、分からない言葉が出てきたときに使う分厚くて堅苦しい重たい本としか考えていなかった。そのため、作中に出てくる荒木のように趣味として辞書をめくったことも、馬締のように辞書に出てくる言葉に対して疑問を持つこともなかった。私にとって辞書は、“わからない言葉の正解を示す本”であり、それ以上でもそれ以下でもないため出版元や版に違いがあってもすべて同じだった。しかし、今回の作品で辞書づくりに携わる人々の熱くきらきらとした生きるパワーに触れ、私は辞書づくりの奥深さや魅力を感じ、辞書に対してまた言葉に対して自然とあたたかみと愛着を感じるようになっていった。「舟を編む」は、私の見えていなかった、見ようとしていなかったものに気付かせてくれたあたたかく、素敵なお話である。

「舟を編む」の舞台は出版社玄武書房の中でも別館にあり、少し他の部署から煙たがられているような埃っぽい辞書編集部で、名前の通り様々な種類の辞書の制作をしたり、辞書の改訂をしたりする部署である。ここでは、日本語研究に人生を捧げる老学者の松本先生、そんな先生の弟子で定年間近のベテラン編集者である荒木、口がうまく要領の良い西岡、愛想には欠けるものの実務能力の高い契約社員の佐々木、言葉のセンスを買われ営業部から荒木によって引きぬかれたどこか抜けているが一生懸命な馬締、玄武書房の花形女性ファッション誌の部署から異動してきた岸辺など個性豊かで人間味溢れるメンバーが働いてい

る。みんな不器用ながらもバラバラのスタート地点から１つの目標に向かって、同士になっていく姿にとても心が熱くなった。彼らの向かう目標というのは、「大渡海」という辞書を１から作り上げることである。辞書を１からつくると一口に言ってもかなり大変で、費用も時間も莫大にかかり、あまり資金を出したがらない会社の協力も受けにくいため「大渡海」は制作を始めてから、岸辺がやってくるまでにすでに 13 年もの時間が経っていた。辞書はつくる際にいくつもの段階を踏む。1 番はじめは用例採集である。用例採集というのは、聞き覚えのない言葉をカードに記録することで、松本先生や荒木は何をするにもこの用例採集カードを手放さず常に言葉にアンテナを張って情報を収集していた。その後、用例採集カードをもとに収録する見出し語を選定し、編集方針を固め、執筆要領を作成する。執筆要領は、辞書の原稿を外部に依頼する際の指針となるもので、これをもとに辞書編集部が見本原稿を提示する。その後原稿を回収し、五十音順に並べ何度も何度も校閲を重ねる。本当にこの言葉の意味は適切か、読み手が納得できるかなどを何人もの手で入念に確認する。私は、辞書が読み手に寄り添ってつくられているということは思いもしなかったため、辞書にぬくもりや温度を感じるきっかけになった。そしてこれらの作業がすべて同じ体温を持つ人間が行っているということを実感し、しばらくぼーっとしてしまった。このように何度も何度も細かいすりあわせを重ねに重ねやっと辞書が完成する。しかし、これでは終わらない。これは収録する内容についての手順に過ぎず、ここから紙や装幀など細かいところにもこだわりを重ねていく。私は、辞書は人の手でつくられていることにやっと気がついたところだったため、このような辞書の内容制作以外の部分の作業もまた全く想像できていなかった。「まだこだわるのか！」と衝撃だった。辞書は中身だけでなく、紙や装幀すべてにこだわり、それぞれに自分の人生を懸けている人がいる。辞書というのは、辞書編集部だけでつくるのではなく、このように多くの熱がこもって形になるというのがとても実感できた。そう思うと私は、「大渡海」という辞書が、単なる“わからない言葉の正解を示す本”とは思えず、たくさんの人の体温の集まった夢の結晶のように思えた。最初「大渡海」は松本先生、荒木の熱量だけで進んでいるように見えたが、徐々

にその熱は広がり、辞書編集部、そして校閲を手伝うバイトの学生、紙を作る会社、そして読者の私にまで届いた。完成の際には、私は作中のみんなと一緒に泣いて笑っていた。しかし、ついに完成したと思ったら、辞書編集部は止まることなく改訂に備え用例採集から繰り返していく。

作中では「言葉は生き物」であり、辞書は育てていくものだと描かれていた。時代の移り変わりとともに、言葉は使う人々や頻度、場面が変わり、退化するもの進化するものそれぞれ形は変わっていく。しかし、それらの言葉が私たちの思いをつないでいくという事実は変わらない。そう思うと、言葉の魅力は「言葉は生き物」というこの一言に込められているのではないかと思う。どんな時代も人間はそんな言葉を用いて、社会という大きな海を渡っていくのだろう。「大渡海」は自由な航海をするために編まれた舟でありたいと松本先生は言っていた。つまり、私たちは用いられる言葉次第でどんな風に海を渡るかは変わっていき、人生は自在に変化するのではないだろうか。

私は人生という言葉を辞書で引いてみた。すると、今までとは明らかに違う感触で「辞書が生きている」と感じることができた。細胞のように規則正しく収まる見出し語、それにぶら下がるように言葉に血が通っていた。薄く手に吸い付くような紙や、丁寧に施された装幀が優しくそれらを包んでいた。確かに、辞書は人がつくっていた。そして言葉も辞書も生きていた。私は、辞書作りに携わる人々のことを思い返し、心が波打った。

一見、無機質に見える文字の羅列に通う温度に気付いた私は、辞書だけでなく社会を見渡した時も、1つの箱としかとらえることができていなかった建物の窓のあかりの中にも、温度を感じることができた。これからも、当たり前のように見過ごしていたなんでもないことの体温に気付き大切にできる私でありたい。そして、何があるかわからない社会という海を私なりの舟を編んで進んでいきたい。

（私の）じん - せい【人生／人世】
見えなかったものが、見えるようになること。その積み重ね。

二等

夢を叶えることが正しいとされているこの時代に読むべき本

児童教育学科２年

佐竹祐美

『ガネーシャと死神』文響社

水野敬也著

私は、大学生という身分であるうちに、たくさんの考え方を吸収したいと思っていた。また、子どもと関わる仕事に就きたいと思っている為、様々な考え方を持ちたいと思っていた。夏休みという、自由なことができる期間にたくさんの本に触れようと思った時、前々から「この本は読んだ方が良い」と母から教えてくれた本のタイトルを思い出した。図書館へ行き、手に持つと最初は本の厚さに驚き、読み切れるか不安だった。しかし、せっかくの夏休みだ、と心を改め、夏休み中に読み切れればいいかと思いながら借りた。手にした本が、夢をかなえるゾウだった。結論から言うと、分厚いなと少し驚いていたことを後悔するくらい、一巻から四巻すべてが面白かった。私がここに書くのは、最終巻である夢をかなえるゾウ４のガネーシャと死神だ。

この本は、余命が残り三ヶ月と医者に言われた、愛する妻子を持つ男が主人公だ。主人公のもとにガネーシャと死神が現れて、そこから物語が始まる。持病がある妻とまだ幼い娘の将来がいる為、自分が今死んでしまうことに不安を持つ主人公は、残された時間で関西弁をつかう像のガネーシャからの課題をこなしていく。

この本を読む前の私は、夢は叶えなくてはいけないもので、叶えるために努力をすることが大切であると思っていた。また、夢を叶えられないことは悪いことだと思っていた。夢が叶えられないということは、努力が足りないことと同じだと、中学三年生の時から思っていたことだったからだ。

私は、中学三年生の時にずっと行きたいと思っていた公立の高校があった。その志望校は偏差値が高い為、中学三年生の一月まで勉強に力を入れていた。しかし、合格する可能性が低いと一月に分かると、どうしても公立に合格する必要があった為、第二志望の公立高校を受けることにした。その高校に合格できて、楽しい高校生活を送ることができたので結論からいうとその選択は良かったのかもしれないが、どうしても心の中で頑張れなかった自分を情けなく思っていた。あんなに努力をしていたけれど、努力が足りなかったから受ける自信も持てなかったのだ。それは大学生になっても思っていることだった。

しかし、ガネーシャは「自分が思い描いた未来は実現できへんかもしれん。そんで、今、自分は実現できへん未来だけを見てる。でも、自分はすでに、たくさんの夢を実現してきたんちゃうか？」と言った。私はこの言葉に心が救われた。私は公立の高校に合格する必要があった為、合格する可能性が低い第一志望校受けることから逃げた。しかし、少しずつ夢は叶えることができていたのではと思い返す。中学三年生の四月では解けなかった問題は、中学三年生の二月の試験日では解けるようになっていた。それは、問題を解けるようになりたいという夢を叶えたことになるのだ。これは小さな夢を叶えたから何だ、と他人から笑われるかもしれない。しかし、情けない自分だと自分に嫌になっていた私は、救われたのだ。夢を叶えられなかったことしか考えていなかった為、しっかりと夢を叶えていたことを忘れていたのだ。

またこの物語では夢についてだけでなく、死についての話もある。もし私が、主人公のようにいきなり余命を宣告されたら、私は死に対する恐怖心によって何もできないと思う。死にたくないという感情で、自分は何も幸福感を得られないまま死んでいくだろう。

しかし私は、死神の「人間は、死を『敵』だと考えたことのしわ寄せを、死に際に受け取ることになったのだ」という言葉と出会い、私は無意識ながらいつか迎える未来を敵だと認識していたことに気がつくことができた。

また死神は偉人の、死に関する言葉も教えてくれた。「『死は人生の終末ではない。生涯の完成である』―ドイツの神学者、マルティン・ルターの言葉だ」この

言葉で、私は死を怖がるより、私の死を看取ってくれた方々に、この人は最期まで幸せな人生を過ごしていたなと思われるように、最期まで生きていこうと考えを変えた。

私は、この本に出会い、夢が叶わなかった時での考え方と、死に対する考え方が変わった。そして、この本を通し得た新しい考え方を、私は子ども達に教えたい。そう思う理由は、私が中学三年生にして、人生を変えさせられた出来事があったからだ。

中学三年生の冬に、私の仲の良い友達が自殺をした。彼が自殺した理由は、受験に対する希望がなくなったことが原因ではないかと言われていた。子どもは希望がなくなったら、簡単に命を落とすことができるのかと、私も子どもだったがそう思わされたほどの、印象的な出来事だった。これは私が大学に入り、教職を取ろうと思えたきっかけにも繋がる。教師になって、希望を捨ててしまった子どもたちに、負けないでもう少し頑張ろうよと言って、子どもたちを支えたいと思ったのだ。

しかし、努力しても頑張ってもダメだと思ったから、この世界から逃げたいと彼は思ったのではないかと、様々な経験をした私は思う。もし彼のように精一杯やっていたにも関わらず結果が伴わなかった人に、私はもう少し頑張ろう、なんて言えない。それでは、どのような声かけをしてあげれば良いのかと悩んでいた時、ガネーシャの「ある夢にこだわって、実現しようと努力し続けるんは素敵なことやけど、その夢に縛られて不幸になってもうてるなら、手放さなあかんときもあるんかもな」という言葉に出会った。私が大人になり、もし目の前で努力をし続けても夢を叶えることができないと嘆いている人がいたら、今までの夢を叶えてきたから、ここからの夢は諦めても良いのではと声をかけたいと思えた。

私は、叶えられなかった夢の数より、叶えることができた夢の数の方を実は多いよと、伝えられる教師になりたいと思う。今まで頑張ってきたことは無駄ではないと、力強く言える教師になりたい。そう思わせてくれたのは、この本に出会ったからだ。この本に出会わなかったら、中学三年生の受験で頑張れなかった自分がずっと心の中で泣いていただろう。この本に出会わなかったら、努力をして

いても報われないと嘆く人に、何も言葉をかけられない人になっていただろう。だから、目の前で苦しんでいる子どもである生徒だけでなく、様々な人を助けたいと思うのだ。そして、私が精一杯やっても報われない時、この本で学んだ事を思い出し、自分自身も助けていきたいと考える。

夢を叶えることが幸せなことだと思われている時代に、私たちは生きている。努力をしていて、夢を叶えて、成功している人たちだけがスポットライトを当てられる時代に生きているのだ。その為、夢を諦めることも幸せだということを、考えたことがない人が多くいるだろう。たくさんの時間を費やしていたものが形に残らず、周りの人からの期待を裏切ってしまうことが、自分自身の幸せに繋がると思わないからだろう。しかし忘れてはいけない。私たちが夢を叶えることに必死になっていたのは、私たちが幸せになりたいと思っていたからだということを。だからこそ、夢を追いかけて不幸になっていくのならば、それは諦めても良いのだと、この本を通して私は考えることができた。

佳作

推しと共に生きる

児童教育学科３年
水野帆花

『推し、燃ゆ』河出書房新社
宇佐見りん著

「推しが燃えた」という一言で始まるこの本は、自分の好きなアイドルがネットで炎上し、主人公である女子高生のあかりがどのように自分の推しと自分自身に向き合っていくかという物語である。自分の一押しのアイドルのことを推しと呼ぶが、あかりも同様に、アイドルグループのメンバーを人生の生き甲斐と感じるほど推していた。あかりには病気があり、その苦しさから逃れたり、現実逃避したりできる時間が推しを推す時間なのであった。そんなある日、推しがファンを殴ったとネットで炎上し、憶測や誹謗中傷が SNS で広がる。

私がこの本を手に取ったのは、自分にも韓国アイドルの推しがいるからである。中学 3 年生の頃からこれまで、約 6 年間にわたり推しを応援し続けている。あかりのように何枚も CD や DVD を買ったし、数えきれないほどのグッズも買ってきた。部屋にグッズを飾ったり、あかりのように CD を並べたりもした。この本のあかりのような苦しいことだらけの人生ではなかったが、自分が苦しいと感じた時に自分を助けてくれて、励ましてくれるのは、いつでも推しであったと言っても過言ではない。あかりがテレビやラジオなどでの推しの発言を毎回ルーズリーフに書き起こすという場面が描かれていたが、書き起こしたルーズリーフに「溜まった言葉や行動は、すべて推しという人を解釈するためにあった」という言葉に私はとても共感した。私の推しは韓国人で、自分は日本人であることから、推しが何を話し、どんな歌を歌っているのか知るために、韓国語をたくさん勉強した。推しがどんな心境から考えた歌詞なのか、発言なのかと考えることも多々あった。それだけでなく、推しが SNS に載せた写真や動画の中で食べ

ているものや推しの好きなものにまで興味を持つようになり、推しのことはもちろん、韓国の文化にも興味を持つようになった。その甲斐もあって、今の自分はそれなりに韓国の文化にも詳しくなっているし、以前よりもずっと多くの韓国語を理解し、話せるようにまでなっている。あかりほどではないかもしれないが、私にとっても推しという存在が私の視野を広げ、私自身の一部となり、人生の生き甲斐になったのは言うまでもない。

そんな私の推しも、私が大学生になってから炎上した。一時期、韓国の芸能界では違法ドラッグの売買が公になり、それに関する内容で逮捕されたり、起訴されたりする芸能人が数多くいた。そんな中で、私の推しも違法ドラッグを買ったことがニュースや記事になり、グループ脱退を余儀なくされた。私の推しも主人公の推しのように、かなりの誹謗中傷がネットに書き込まれていた。推し自身の気持ちは計り知れないが、私も一人のファンとして、ネットへの書き込みを見ていてとても辛かったのを今でも思い出す。あかりの言葉に「これからも推し続けることだけが決まっていた」とあるが、私もあかりと全く同じで、推しを推さないという考えは 1 ミリも生れなかった。自分を辛い時に支えてくれていた推しという存在を簡単に嫌いになれるはずもないし、推しを嫌いになるということはこれまでの自分までも否定するような気がして、推しを推さないという選択肢は私の中に存在しなかったのだと思う。きっとあかりも私と同じような気持ちをどこかで抱いていたのではないかと、このシーンを読んでいて感じた。

あかりが推しのグループ脱退前最後のコンサートに行ったシーンで、次のような文章があった。

> 最後の瞬間を見とどけて手許に何もなくなってしまったら、この先どうやって過ごしていけばいいのかわからない。推しを推さないあたしはあたしじゃなかった。推しのいない人生は余生だった。

この文章を読みながら、私は、私の推しのグループとして最後になってしまった音楽番組の様子を思い出した。私の推しは、あかりの推しがしたような引退宣

言などなしに、突然グループ脱退が決まったため、番組内での推しはいつも通りの輝いている推しだった。心底音楽を楽しんでいるように見えたし、ステージで歌えて幸せそうにも見えた。そんな推しの様子を私はいつも通り画面越しで、瞬きもせずに見つめていた。私は、推しの最後のステージを噛み締めることが出来ずに終わってしまったが、あかりにとってはそうではなかった。これが最後になるのだと思いながら推しを見ることになってしまったら、確かにあかりのように、先の人生でどう生きていけば良いのか分からなくなってしまうこともあるだろう。あかりの人生において、どれだけ推しという存在が大切で、それまでのあかりをどれだけ推しが支えてくれていたか分かる文章だと感じた。私のように、あっけなく推しと別れることになるのも辛いが、最後だと知りながら推しと別れることになるのも辛そうで、読んでいて自分までも心が空っぽになる感覚だった。

近頃は、様々なタイプのアイドルがいるため、推しがいる人が多い。私の周りにもそういった友人が沢山いる。推しに対して抱いている想いは人それぞれではあると思うが、この本は推しがいる多くの人の心に響く作品になっていると感じる。また、私の推しに対しての想いを再確認させてくれたり、自分の推しとの向き合い方についても考えさせてくれたりする、そんな作品であった。この本を読んでさらに、これからも私が私らしくあるために、推しを推し続けていこうと決心することが出来た。これから先、沢山の場面で推しに支えてもらいながら、推しと共に生きていきたい。

佳作

アルジャーノンに花束をを読んで

韓国語学科１年

薮﨑累維

『アルジャーノンに花束を』早川書房

ダニエル・キイス著　小尾芙佐訳

近年日本や隣国である韓国では学歴重視の社会となっています。では、知識のある者が人間として優れており、幸せなのでしょうか。「知能を求める心が、愛情を求める心を排除してしまう」これは前書きにも記されている主人公チャーリィ・ゴードンの作中のセリフです。まだ内容を知らない私でしたが、不思議とこの一文に心を引き付けられました。恐らくこれがこの物語のテーマであるとは感じましたが、その時はまだそのセリフの重大さまでは気づけませんでした。

この物語の主人公であるチャーリィは、32 歳になっても知的障害のため幼児程度の知識しか持っておらず、亡くなった祖父の親友であるドナーが営むパン屋で働いています。知的障害のために家族からも見放されたチャーリィは、友達を増やすために賢くなることを望んでいました。そんな時、知能が上がる手術を受ける機会を得ます。もともと素直で純粋な思いやりのある彼が知能を手にすれば、獅子に鰭で、周りから愛される完璧な人間になるだろうと私は思いました。同じ手術をすでに受け知能の高くなったネズミの名前をアルジャーノンといい、手術を終えたチャーリィはアルジャーノンにライバル心を抱き、やがて手術を施した医者をも超える天才へと変貌します。

この物語はチャーリィの一人称視点で描かれ、手術前の言葉すらうまく書けない彼の文章は解読することさえ一苦労です。句読点やスペルミスなど多くの間違いがあり、どこか違和感を覚えました。しかし天才へと変わった彼の文章を読み進めるとこのときはじめて手術前の違和感に気づいたのです。それは登場人物の人物像が全く想像できなかったことです。大抵、人は他人の説明をすると

き、体型や瞳の色など特徴を伝えますが、手術前の彼の説明は容姿に触れず名前と関係性だけだったのです。手術後初めて、パン屋の店員を「のっぽのフランクとでぶのギンピィ」と表現し、今まで名前だけだった登場人物のイメージを想像することができましたが、私はこの変化に素直に喜ぶことができませんでした。私たちはしばしば人を見た目だけで判断し、レッテルを貼る。酷いときにはそれがいじめや差別へと発展してしまいます。手術前の純粋で素直な彼に、私たちの時折見た目で判断する汚い部分を知られたような気がして、恥ずかしささえ感じました。

知識を得たチャーリーは友達の笑顔が、嘲笑によるものだと気づき、人間を信じる素直さを失って、怒りや憎らしいといった感情が生まれだします。手術を施してくれた教授ですら、手術前の自分を人間と見なさずモルモットとして扱われていたことに気づき、やがて自分を愛してくれている人とも距離を置いてしまいます。人間の黒い部分を知ってしまった彼に同情しますが、私も嘲笑する側の一人であったことを思い出しました。昔、私は友達のアルバムを拝見した際、ダウン症である友達の友達を見て笑いました。幼さを言い訳にはできませんが、ひどく愚かで浅はかだったと思います。友達に「この子はとてもいい子で面白くて、あなたに笑われるようなことは何一つしていない」と言われたとき、当時小学生だった私はひどく恥ずかしかったのを今でも覚えています。見た目、ましてそれが生まれ持った変えようのないものを笑うことはひどく愚かで、相手だけでなく相手を大切にする人や自分をも傷つけるものだと、改めて痛感しました。

> 「ぼくは人間だ、一人の人間なんだ - 両親も記憶も過去もあるんだ - おまえがこのぼくをあの手術室に運んでいく前だって、僕は存在していたんだ！」

というセリフがとても心に響きました。誰にだって生きてきた人生があって、愛する人がいて、愛してくれる人がいる。それを私たちは忘れずに相手の立場になって考えることが大事だと思います。そして勘違いしてはいけないのが、生まれ

ながらに持った障害を、哀れみ特別視することは侮辱に変わりないということです。

チャーリィを捨ててしまった彼の母は、チャーリィの知能が他の子供たちと同じ普通になることを望んでいました。彼女が愛していたのは、チャーリィではなく普通の日常だったように思います。なぜ実の息子を愛するのに普通でなくてはならないのか。そもそも普通とはいったい何なのでしょうか。周りの子どもたちの知能だって十人十色で同じ知能を持っているものなどいません。人には人の個性があり、チャーリィのやさしさや努力家な面に気づいて、そこを尊重し愛してやれなかったのかと思うと残念です。

さて、知識を深め、人間の愚かさや汚さまでを知り孤独となったチャーリィは本当に幸せなのでしょうか。否です。知能ばかりを求め聡明になったとしても、他人を愛し、他人に愛されることの大切さを知らなければ、チャーリーのいう「なんの値打ちのない」人間へとなってしまいます。私はチャーリィがアルジャーノンを解放するまで賢くなったアルジャーノンを幸せだとは思いませんでした。賢くこそなったものの、学者たちにモルモットのように扱われ、実験のテストをこなす毎日、ほかのネズミとかかわることもなく、ゲージに閉じ込められていました。そしてチャーリィもまたアルジャーノンと同じだと感じました。

冒頭でも話した通り、現代の社会は学歴、知識、仕事能力に重点を置く傾向にあります。本当に大事なものはそれらでしょうか。知識を身に着け、傲慢で自己中心的に権力を振りかざす者が、会社や国の中心となっています。本当にそれで大多数は満足しているのでしょうか。他人を思いやり慈しむ気持ちが評価されにくい社会は間違っているように思います。私たちはチャーリィが教えてくれた、愛情と知識のバランスについて考えなければなりません。

佳作

『夢をかなえるゾウ』を読んで

児童教育学科３年

飯沼菜奈

『夢をかなえるゾウ』飛鳥新社

水野敬也著

今、書店に行くと、成功法則書や自己啓発本と言われる、自分の人生において成功を手に入れるための方法や自分に満足する生き方を教えてくれる本を目にしたことはないだろうか。そして、その本を見た瞬間、思わず手に取りたくなったことはないだろうか。少なからず私はそのような人間の代表である。私は普段から本を読むとすれば、このような成功法則書と言われる本を読むことが多い。今回の読書感想文で選んだ本も成功法則書である『夢をかなえるゾウ』という本だ。また新たな成功法則を知れると思い、心躍る気持ちでこの本を読み進めたが、この本の優秀さには驚いた。成功するために大切な考え方や行動が、この一冊の中にわかりやすい言葉で凝縮されていた。これほど、面白く、読みやすく成功の秘訣を表現した本がこれまでにあっただろうか。そして、この本には「成功法則書を読みたいと思う気持ちが強かった、これまでの私の心理」までも見破られることとなった。今まで成功法則書を読んできて、このような経験はなかったため感心した。もっと早く出会いたかった一冊である。

この本からは「教訓」を得ただけではなく、同時に「共感」を得た部分もあった。私は人よりも自分に厳しく、真面目でストイックなところがある。言い方を変えれば人よりも努力ができると言える。そのことから、努力の成果として、自分の満足いく結果も多く出してきた。例えば、高校の部活でやっていた硬式テニスの実力向上に向けたトレーニング各種の習慣づけとその努力の成果・運動やマッサージ、ヘルシーな食生活による 10kg 減量や体を細くするダイエットの成功とその体型維持・新しい環境が人より苦手な自分の性格に打ち勝ち、コミュニ

ケーションスキルを向上させたこと等が大きく挙げられる。これらの努力の経験から、この本に載っていた、成功を手に入れるための秘訣には、自分が元々理解していて、自分の経験から学び自分で開拓していったものもあり、その部分には共感した。自分がぼんやりと思い描き、自分の中に落とし込んでいた成功の秘訣をこの一冊がきれいに論理的に言葉で説明していた。きちんと言語化された成功の法則を知ることで今後、自分を更に成長させられると思った。これらの共感できたことに対し、共感できない、初耳の成功法則もあり、本を読む中でその部分には特に心を動かされた。そのような成功法則の中でも一番心に響いた成功法則について話していく。

私は、自分に自信を持っている部分もあるが、まだまだ自分に満足できていない部分もあり、後者の方が大きいと思う。そして、人よりも後者が大きいと思う。だから、私は常に「まだまだ頑張らなければならない」というスタンスで日々の生活を送っている。何でも真面目に物事を考えがちで、考えすぎてしまうこともあると思う。学ぶ意識が高く、何事においても何かしらの学びを吸収して成長したいと思っている。このような調子で日々生活を送っているため、よく読む本は成功法則書のようなものなのである。一見、このような私の特徴は良く聞こえてくると思う。だが、私の場合は度が行き過ぎているのだとこの本に気付かされた。まず、この本で何回も出てくる、大切だと言われていることがある。それは、人を喜ばせることで成功やお金が得られるということだ。このことを踏まえて次のことを話すが、「大きな欲を持っている」ということは「大きく欠けている」ということなのだと示されていた。自分が持っている、お金や社会的地位といったものに満足できずに、自分の持っているものでは足りないと思うことは、「大きく欠けている」ことだと言える。その大きく欠けている状態は「自分が満たされていない」状態だと捉えることができる。自分が満たされていないと、他人を喜ばせたり、他人のことを考えたりする余裕がなくなってしまう。結果、人の力を借りて、お金を手に入れたり、成功したりすることができなくなってしまう。このような考え方は、この本を読むまでの私にはなかった。このまま成長欲の強い自分でいたら、成功できる物事のレベルには限界があり、確かに成功は逃げて

いくと思った。これは大きな発見であった。そして、ではその大きく欠けた状態をどう改善していけばよいのかという話も出てくる。そこで大切になってくるのが「感謝」であると示されていた。足りていない自分の心を「ありがとう」で満たすことが成功の秘訣であることを学んだ。私たち人間が、「自分のお金や名声、地位、名誉を自分で手に入れている」と思っているなら、その考え方を変え、「お金は他人がくれるもので、名声は他人が自分を認めたからくれるもので、全部他人が自分に与えてくれるものである」という風に考えることが勧められていた。この考え方に私は感銘を受けた。欠けている心を感謝で満たすという考え方は予想ができなかったし、私にとって意外な答えであった。成長欲が強いのは、私の生まれつき備わっている性質で、変えることはできず、一生この性質と付き合っていくのだと思っていた。だが、感謝に関する考え方を変えることで、今までより成長欲は弱まっていくのかもしれないと思った。

私のダイエットの経験からこの教訓を話すとすれば、私がダイエットに成功できたのは、自分の力が優れているからだと捉えることができるが、自分の力だけで綺麗な体を手に入れたわけではないということだ。私のダイエットを成功させた要素としては、私の力以外の要素が沢山ある。例えば、母が作ってくれるヘルシーなおかず・ランニングコースのある公園が近くにあること・自分のモチベーションを挙げてくれる K-POP アイドル・自分をやる気にさせてくれる音楽・トレーニングのメニューを紹介してくれるユーチューバーの方・お風呂やトイレが常に綺麗に保たれていること・毎食、母が、飽きない美味しいごはんを考えて作ってくれること・自分の部屋があること・いつも私思いの姉、等と挙げていくときりがないほどである。私の身の回りには、ダイエットができる様々な環境があり、その環境全てに感謝すべきだと思った。そして、自分の心を満たして、自分の実力や性格に満足できるようにしたいと思った。これまでの私はこのダイエットができる環境にあまり注目できておらず、自分の頑張りに注目が行ってしまいがちであったと思った。

この本を通して、成功に必要な考え方や行動を、論理的な説明と共に理解することができ、共感と教訓を共に得ることができた。自分の努力の経験から共感で

きる成功法則や、私の意表をついた成功の法則があり、それらを教訓として得ることができた。その教訓の代表的なものとしては、自分の置かれている環境に感謝をして自分の心を満たし、人の幸せを願えるようになることだ。この教訓によって、成長欲の強い自分の心理を理解し、自分の感謝に対する考え方を見直すことができた。

この作品を通じて、「自分の心を満たす」という、成長するために大切な、根本的なことを知ることができた。この本は私の今後の成長に大きく貢献してくれることであろう。このような素晴らしい本を作ってくれた著者の水野敬也をはじめとする方々、そして、この本を貸してくれた友達、この本を紹介してくれたあるファッションインフルエンサーの方や書店に感謝したいと思う。

審査員特別賞

「韓国文学」

韓国語学科１年
本村波瑠

『菜食主義者』クオン
ハン・ガン著

この本を読み終えてまず思ったことは人間の中にある地獄を見たような容赦のない本だということです。語られ方こそ穏やかですが、その静かな衝撃が重なり、読むのに凄く時間がかかりました。また、1 度読んだだけでは内容を理解することが難しくて何度も読み返しました。

選んだきっかけは、目白の 100＋α に目を通した時に題名に惹かれたからです。この本は「新しい韓国の文学」シリーズの第 1 作目として届けられ、韓国で初となるイギリスのブッカー国際賞を受賞しました。また、著者のハン・ガンは韓国で最も権威のあるイサン文学賞を貰っています。題名だけで選んだ私は、何の知識も無いままダイエットの小説か何かだと思って読み始めたのでとにかく衝撃を受けました。そこで、改めて菜食主義者とはベジタリアンとも呼ばれ、動物性食品を避けて植物性食品だけを摂る食生活を行う人のことです。菜食主義になるきっかけは動物愛護、健康や美容、宗教など様々です。しかし、この話の主となるヨンヘという女性が菜食主義者になったきっかけは「夢」でした。

話は 3 章に分かれていて、ヨンヘの周りの人々にそれぞれ焦点を当てて語られている連作小説集となっています。第 1 章の 1 ページ目から「私が彼女と結婚したのは、彼女に特別な魅力がないのと同じように、特別な短所もないように思われたからだった。」という夫の視点で始まります。ある朝、冷蔵庫にある食材をビニール袋に放り込むヨンヘを見つけた夫は止めようともみ合いました。初めは突然の妻の変化で数ヶ月ぶりに 0 時前に帰るなどをした夫でしたが、季節が過ぎると菜食と不眠で痩せたヨンヘをただ見ているだけでした。「夢を見た

の」しか言わないヨンへもどんな夢を見たのか聞かない夫も私にはもどかしく感じました。夫はヨンへに好意的な興味関心が完全にないということがわかります。事を知り心配したヨンへの親戚達が集まり父から肉を勧められる場面があります。抵抗するヨンへに意地になった父は両腕を抑えさせて頬を殴ったり無理やり酢豚を口に押し込んだりします。ヨンへは獣のような悲鳴をあげてテーブルにあった果物ナイフを手首に突き刺しました。やがて夫は精神病棟に入ったヨンへを拒絶し離れていきます。父や夫のヨンへに対する日々の言動を人間の獣のような動物的部分として、またその被害を獣から花や木の植物になりたいという菜食の気持ちとして表しているのではないかと思いました。この章では夫の肉料理についての回想が印象的でした。

> 「ショウガのみじん切りと水あめで漬け込んだ甘くて香りの良い豚バラ肉。しゃぶしゃぶ用の牛肉をコショウと竹塩、ごま油で味付けし、もち米の粉をまぶして焼いた、もちもちしたチヂミのような彼女だけのオリジナル料理。切り刻んだ牛肉と漬けおきした米をごま油で炒めてから、モヤシをのせて炊いたモヤシピビンバ、大きなジャガイモの入った鶏鍋もなかなかのものだった。ひたひたの辛いスープが鶏肉にじんわり染み込んでいて、私は一気に三皿も平らげたりしたものだった。」

とこれほどまでに長く書かれたのは肉を食べないヨンへと対比した夫の動物性を最大限に引き出させる為ではないかと考えました。

第 2 章はヨンへを芸術的、性的対象として狂っていく義理の兄の視点で、人間の欲望について蒙古斑というキーワードから話が広げられています。

第 3 章は変わり果てたヨンへや夫、残された息子を前に生きるヨンへの姉、インへの話です。前の 2 章と変わってヨンへには植物になりたいという明確な気持ちの変化がありました。この章では、あそこでもっとこうしていたらと後悔し続けるインへの姿が印象的でした。

この本のポイントとなるのは、著者の素晴らしい表現力だと思います。「わた

しが信じるのはわたしの胸だけよ。…胸では何も殺せないから。手も、足も、歯と 3 寸の舌も、視線さえなんでも殺して害することのできる武器だもの。しかし胸は違うわ。この丸い胸がある限り、わたしは大丈夫。…でも、なぜ胸が痩せていくのかしら…何を刺すつもりでこんなに鋭くなっていくのかしら。」という所を読んだ時は角度のついた表現力の高さに圧倒しました。他にも「自分の体に傷口が開かれていると感じた。まるで体より大きく開けられた傷なので、その真っ暗な穴の中に全身が吸い込まれていくかのようだった。」という所では、心に穴が空くなどの表現はよく聞くが、このような表現が何のインスピレーションを受けて思いつくのか私には想像できなくてわくわくしました。また、「生きるというのは不思議なことだと…何かが過ぎ去った後も、あのおぞましいことを経験した後も、人間は飲んで食べて、用を足して、体を洗って、生きていく。ときには声を出して笑うことさえある。」という文は、悲しいことがあった時に私がよく考えてもやもやしていたことでした。それが綺麗に文でまとめられていてスッキリしました。人間の哀れで強い部分だと思います。

私は冒頭で人間の中にある地獄を見たという言葉を使いましたが、まさにそれが人間の動物性だったのではないかと思います。ヨンヘが植物になりたいという一心で貫く意地すらも結局は動物性から来ているものだと感じました。人間は植物にはなれないというのが私の考えです。人間として生きることについて改めて考えさせられる作品でした。

この本は日本文学をよく読む人におすすめしたいです。本としての刺激があることはもちろん、韓国文学らしさと比較できて楽しめるのではないかと思います。あとがきを読んだ後にはまたこの本を読み返したくなるような楽しさがあります。

近年、韓国文学への注目は高まっています。いざ特徴を言葉にすると難しいですが、日本とは似たようでどこか違う魅力があります。歴史や社会背景を織り交ぜながらも自由な表現をされていること、優秀な翻訳者が増えていることも要因です。

本の結末をどう捉えるかは人それぞれです。私はこの本を通して伝えたい”菜

食主義者”についての考えをもっと深めたいと思いました。この機会が韓国文学への興味に繋がるきっかけになれば良いと思います。

2021年度図書委員

心理カウンセリング学科	田中　勝博
心理学研究科	加賀美　常美代
人間福祉学科（生涯福祉研究科）	六波羅　詩朗
子ども学科	山中　智省
児童教育学科	小宮山　郁子
メディア学科	馬場　一幸
社会情報学科	内田　康人
地域社会学科（国際交流研究科）	石井　貫太郎
経営学科（経営学研究科）	竹内　進
英米語学科	石原　健
中国語学科（言語文化研究科）	胎中　千鶴
韓国語学科	申　貞恩
日本語・日本語教育学科	金澤　裕之
歯科衛生学科	佐藤　昌史
製菓学科	小田　耕三
ビジネス社会学科	大塚　敬義

新宿図書館館長	中山　博夫

2022年1月14日発行

編集・発行　目白大学新宿図書館